

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	茨城大学附属図書館蔵「とりかへばや物語」の研究
Author(s)	田口. 守
Citation	茨城大学教育学部紀要(26): 1-13
Issue Date	1977
URL	http://hdl.handle.net/10109/10798
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

茨城大学附属図書館蔵『とりかへばや物語』の研究

国文科国文学研究室 田口 守

(一)

筆者は、本学附属図書館蔵書文庫中、国文学関係の文献に限定して調査しているものであるが、その間知り得た資料中、今回は『とりかへばや物語』（写本・四冊）について報告することにする。

茨城大学本『とりかへばや物語』（仮称）は、茶色表紙、タテ・ヨコ26.5×18.7cm、袋綴、四冊九行本で、その序文から山岡浚明本系の一本と速断され易い体裁を備えているが、本文の分析の結果は非浚明本系で、その序文も、浚明序と共通する文章を約80%も含みながらも全体としては全く独自のものと判明。しかもこの物語は、江戸時代に出版された形跡がないと言われているにもかかわらず、本書の序文には「梓にちりばめ、あまねく世におこなはむころざしになむ」と、出版、板行を意図した文言があり、極めて貴重である。

(二)

茨城大学本『とりかへばや物語』の表題は、第一、二冊では表紙左肩に「登理加幣波耶物語一(二)」と直接墨書。第三、四冊では「登梨加幣はや物語三(四)」と書かれた題簽を付している。この第三、四冊の場合も、表紙に直接墨書した「三」「四」の文字が題簽下に見えることから、本書の表題は第一、二冊の形式がもとの姿と考えることができる。

内題は、各冊ともに本文に先だって「とりかへばや一(二)、三、四」とあり、また、各冊末尾には「静屋藏書」の朱印を有する。この藏書印は、国立国会図書館分館静嘉堂文庫蔵の四冊九行本の藏書印と同種と考えられる。

第一冊、墨付八十八葉。一丁表より裏にかけて注目の序文があり、本文は二丁表から八十八丁裏まで。「いつの比にか権大納言にて……」～「おもひなす

には、うきもうからずとなん」(句読点、濁点、筆者。以下同じ)。
第二冊、墨付五十葉。「よしの、山の峯の君」～「すぐしがたくて、たちよ
りたまひぬとぞ」。

第三冊、墨付九十六葉。「四月にもなりぬれば」～「思ふにつきぬうちの川
舟」。

第四冊、墨付九十四葉。「内侍のかんの君」～「ひとかたならずかなしとち
とりかへばや終」。

形態はこのように、一般に見られる四冊本である。

本書の最大の特色は、何といてもその序文にある(次に掲げた写真を参照
されたい)。

ものがたりぶみといふもの、しぐれ降おけるならのはの、ふるき御時よ
りかみつかたには、さることありともきかず。たひらのみやこしめたまひ
しのちつかたより、さるものはいできにけらし。たかとり、うつぼの物語
をはととして、それがこ、うまごといふくさはひなるもの、さはにいでき
にたるが、いまのよには、またみなかくれはて、のこれるものおほし
ともきかず。それがなかに、とりかへばやといふふみあり。これをものに
かうがへるに、ふたくさなむある。はやくありしものは、いつのほどにか
ほるびにたり。つぎていできたるは、このふみになむある。すべておかし
く、あはれなるものなれば、こたび、賀茂季鷹朝臣をそよのかして、とも
ぐに、あやまれるをなほし、かなのたがへるをもしるしつけて、あづさ
にちりばめ、あまねくよにおこなはむころざしになむ。

文政五年二月 城戸 千 楯

右序文の問題点は、大きく見て二つある。一つは俊明本序との関係、二つは先に述べた「あづさにちりばめ」の問題である。

次に、俊明本序との関係を調べるため、俊明序を底本にし、本書の序文との異同を示してみた。俊明本は、内閣文庫蔵東山人芳麿筆本によった。なお茨城大学本は、右側の小活字。その無いものは底本の通りである。黒丸印(・)は当該文字を欠く場合。原則として、漢字、かな、かなづかい等の表記上の差異は無視した。

まのりぬやふくさひはしりぬ
まのりぬやふくさひはしりぬ
まのりぬやふくさひはしりぬ
まのりぬやふくさひはしりぬ
まのりぬやふくさひはしりぬ
まのりぬやふくさひはしりぬ
まのりぬやふくさひはしりぬ
まのりぬやふくさひはしりぬ
まのりぬやふくさひはしりぬ
まのりぬやふくさひはしりぬ

ものがたりふみといふもの、しぐれふり・けるならのはの、ふるき御とき
よりかみつかたには、さることありともきかず。たひらのみやこしめ給ひ
しのちつかたより、さるものはいできにけらし。たかとり、うつぼのもの

がたりをはゝとして、それがこ、うまごと
いふくさはひなるもの、さはにききにたる
が、いまのよにはまた・かくれはて、
のこれるものおほしともきかず。それがな
かに、とりかへばやといふふみあり。これ
を物にかうがあるに、ふたくさなむ有。は
やくありしものは、いつのほどにかほろび
にたり。されどそのうたふたつみつはもの
にのこりたれば、それとはしりぬ。これに
いできたるは、このふみになむある。
つぎたるものをば、いまとりかへばやとぞ
いふめる。これはまたく今あるものなり。
とりてみれば、いとすゑのよの人のてにい

城戸千楯なる人物は、『国学者伝記集成』によると、安永七年(一七七八)
 生れ、弘化二年(一八四五)没。京都錦小路室町に生れ、同じ場所に居住し、
 通称、万治郎、範次、蛸子屋市衛門(書林を業とす)。号は紙魚室、又、蠹室。
 本居宣長、荒木田久老に学び、著書に『雅言通載抄』『和歌ふるの山ぶみ』が
 あるという。彼の『とりかへばや物語』出版の企画と、「書林を業とす」とい
 う『国学者伝記集成』の記述とは、関連するかもしれない。なお『統国学者伝

. あつさにちりば
 なたよりあらんことをとて
 め、あまねくよにおこなはむころさしに

 なむ。
 城戸千楯
 文政五年二月
 やよひのつごもりのよしるしぬ 宿禰俊明

右対校の結果からも明白なように、城戸千楯の序文の八割以上が俊明序に拠って作られている。(俊明本は鈴木弘道『俊明本とりかへばや』をも参照。以下同じ) 真の異文と呼べるのは、「こたび賀茂季鷹朝臣をそゝのかして、ともどもに」と「あづさにちりばめ、あまねくよにおこなはむころさしに」の二文に過ぎない。しかし、この二異文によって、城戸千楯が賀茂季鷹の協力を得てこの物語の本文を校訂し、上梓した(する)意になり、その内容は一変する。いささか剽窃めいた一文ではあるが、文政五年に、城戸千楯の手によって『とりかへばや物語』出版の動きがあったことだけは、これによって否定できなくなった。

.
 できにたれども、すべてをかしくあはれなるものなれば、よむがまに
 こたび賀茂季鷹朝臣をそゝのかして、ともどもに
 あやまれるをなほし、か

 なたがへるをもまたかたはらかうがへたることをもしるしつけて、見る

『記集成』によって、これに、

鐸遇舎ヲ設ケテ国学ヲ教ユ

という一項を加えることができる。

加茂季鷹については『国学者伝記集成』に詳しいが、こゝでは省略して『とりかへばや物語』についてはのみ記すことにする。『とりかへばや物語』の伝本には、賀茂季鷹の奥書、識語をもつものが数本存在する。その一つ、静嘉堂文庫四冊九行本（渡明本）の奥書を引用しておく。

此とりかへばや物語は、江戸に侍りしをり、山岡明阿の本をかりて人してうつさせしなり。ふるきはうせて、是は今とりかへばやなりといふ説あり。いとまなさに句読をだにきらず。たゞ一わたりみしのみ、いとま見（出）してこそ。

(三)

賀茂季鷹判

『とりかへばや物語』に対する現代の評価は、それが改作本であることや、男女の性の交換といった興味本位の内容などから、あまりかんばしくない。仮りに再評価の動きはあっても、それは性的倒錯の世界を描いた作品として珍重視するに過ぎない。ところが、江戸時代の渡明序や千楯序が、「おかしく、あはれなるもの」（千楯序）としてこの作品を把握していることは注意してよいだろう。城戸千楯の序が渡明序を承けているにしても、「あづさにちりばめ、あまねくよに」広めようと企画したのは、この作品が「お（を）かしく、あはれなるもの」であったためである。

『とりかへばや物語』の内容は、大略次の通りである。

権大納言の二人の北の方から、男、女の二子が生れたが、男は女性的、女は男性的傾向が強かったので、父は男子を女として、女子を男として育てた。やがて男装の女は中納言にまで昇り、右大臣の四の君と結婚、女装の男は、女春宮のお相手役に選ばれ、尚侍（女官長）として宮中の人となった。時に色好みの宰相中将という人物がいて、中納言（実は女）と親しく交際しているうちにその妻四の君と枕を交わす。四の君はその時まで処女であった。その後も二人

はしばし密通、四の君は女の子を産んだ。夫の中納言は当然妻の浮気を知り、その相手を宰相中将と知りながらも、自分の秘密を隠すため、女の子を自分の娘として育てる。或る時、色好みの宰相中将は、中納言が女性であることを見破り、これとも契る。中納言は妊娠、出家を決意する。その頃、中国より帰朝して吉野山の麓で仏道に励む吉野宮という方があった。中納言は、何かこの人に相談する。そして、出産の日が近づき、宇治にある宰相の別荘へ隠れて男子を産んだ。その頃、四の君も宰相中将の第二子を宿し、宰相中将は宇治と京を忙しく往復する。

一方、尚侍（実は男）は、女春宮と昼夜生活を共にしている間に、これと密通。二人の仲は、よりむつまじくなり、順調に進んでゆく。色好みの宰相は尚侍にも言い寄るが、失敗に終ったりする。あの中納言が宇治へ姿を隠すと、京は大騒動。尚侍（実は男）も、中納言を探すべく男装して吉野宮を訪れ、これまでの事情を知る。そこで中納言を吉野へ呼び、中納言が尚侍の役を、尚侍が中納言の位置にと、それ〴〵を入れ替えるべく計画する。やがて京へ帰った二人は、真正正銘の男の中納言、女の尚侍として、これまでの生活を継承する。男中納言と四の君の結婚生活も実質的なものとなり、宰相中将のつけ込む隙がない。女春宮は尚侍（男）の子を宿していたが、女尚侍は極秘裡に出産させ、子供を父に託す。そして、女春宮を慰めるべく、時々中納言（前の尚侍）を通わせる。女春宮は、最後に女院となる。

女の尚侍は、帝の寵愛を受け、女御、中宮となり、帝との間に生れた子は春宮となつて、すべてめでたくおさまる。

このような内容の現『とりかへばや物語』が、『古とりかへばや物語』の改作本であることは、渡明序の通りである。『古とりかへばや物語』と現『とりかへばや物語』の関係については、『拾遺百番歌合』、『風葉集』所載の和歌それに『無名草子』の評言が直接の資料となる。『拾遺百番歌合』中の『とりかへばや物語』関係歌は、詞書中に引用された二首を加えて全八首。『風葉集』には『とりかへばや物語』の歌が、詞書中の一首を加えて十三首。他に『今とりかへばや』の歌が六首ある。

さて、『拾遺百番歌合』の全八首中、現『とりかへばや物語』と一致するも

のは、次の二首（内、一首は詞書中）。

男のはじめて、「これやさは入りてはしげき道ならん山口しるくまどは
るるかな」といへりける返り事に とりかへばやの前関白四君

ふもとよりいかなる道にまどふらんゆくへも知らずをちこちの山

『風葉集』の場合も、詞書中の一首を加えた右の二首である。（『今とりかへばや』中の六首は、全て現『とりかへばや物語』中にある）。

右引用の詞書中のものを加えた二首は、現『とりかへばや物語』巻一の冒頭近くにある。詳しく言えば、巻一の全二十首中の第三番目「これやさは」の歌、第四番目「ふもとより」の歌である。これら以外に現『とりかへばや物語』との共通歌を見出せないことによつても、改作の大幅なことが推察できるのであるが、このことについては詳しく述べない。

「古」「今」両「とりかへばや物語」を比較論じた『無名草子』の評言を要約すれば、『古とりかへばや』が「言葉統きもわるく、物恐ろし」き所の多い作品、優美さの欠けた伝奇的怪奇趣味の傾向の強い作品であったのに対して、『今とりかへばや』は「あはれ」に「をかしき」所の多い作品で旧作より優れている、とでもすることができようか。城戸千楯より山岡俊明へと「おかしく、あはれるもの」という評言の系譜を逆にとりゆくと、この『無名草子』に逢着する。われわれも、性的倒錯の世界を描くといった当世風な理解を排して、男女の交換という原作の設定より出発しながらも、そうした異常な状況下でかえって増幅された、親子、夫婦、兄妹等の様々な愛の姿を、まじめに追求した「をかしく」「あはれ」な物語として、この改作本『今とりかへばや物語』を再評価すべきと考へる。

茨城大学本『とりかへばや物語』には、俊明本のような頭注はなく、行間注記の類も僅少で、本文の異同に関するものに限られる。こゝでは俊明本（東山人芳麿筆本）との比較を中心に本文の性格を明らかにしておきたい。

行間注記の中で、他本との校合の結果を示す「イ」の符号を付して異同を明示するものを列挙する。（△ √内は俊明本当該本文、その下の数字は、むさし書房刊『俊明本とりかへばや』のページ数。）

とりかへばや物語 田口

巻一

いとよめに^{人イ}に見えていまめかしく（20丁オ） || へいとよめに^{人イ}に見えていまめかし

く√25べ8

むねぞうちさはき給ふや^{人イ}（27丁オ） || へむねぞさわざ^{つちさわぎイ}給ふや√33べ6

おなし心にきこえあはせて（44丁オ） || へおなじ心にきこえあはせて√51べ2

あいな^{の御イ}き物はちやとて（54丁ウ） || へあいな^{の御イ}の御物はちやとて√57べ4

さはいへといか○の御さまや^{人イ}（55丁ウ） || へさはいへどわかなの御さまや

58べ8

みたてまつる女君は^{人イ}（55丁ウ） || へみたてまつる女君は√58べ8

なきしつみ給へるも^{人イ}（58丁ウ） || へなきしづみ給へるも√61べ5

巻二

うち^{あい}はせさせて（13丁オ） || へうち^{かい}はせせて√108べ6

お○こなれ（15丁ウ） || へをとこなれ√111べ5

巻三

うち^{もイ}みいてたるにうつゝの事（13丁オ） || へうち^{人イ}みいでたるも、うつゝの

事√159べ6

いとしのひたちいて給に^{まイ}（80丁オ） || へいと忍ひたち出給ふに√231べ3

巻四

よ人^{のイ}をしはかるも（42丁ウ） || へよ人^{のイ}おしはかるも√295べ3

この他、「あか」「なくか」等、本文に傍記する例が約十五例ある。また、本文の脱落に関する注記が二ヶ所ある。一つは、

おとろくしからぬ御心ちにて

「按カ、筆者」

栄足梅コ、ニ哥有ツカ落字セシナルヘシ
てかくのみはれくしからぬ(巻一・27丁オ)

この箇所を浚明本について見ると、

おどろくしからぬ御心ちにてすぎゆけば、さのみもえこもりぬ給はず。

大殿うちなどにまいり給はむとてかくのみはれくしらぬ(50ペ・傍線筆者)

右傍線部がその脱落本文である。

他の一つは、

ものおもはしき御心のすむにまかせてとうちあけて(巻一・59丁オ)

これは浚明本でも

ものおもはしき御心のすむにまかせてと うちあけて(59ペ)

以上のように、本書の注記の類は本文の異同に関するもののみで、しかも極めて僅少である。異本との校異を示す「イ」の数も少ないことから、対校本も本書と同系統のものであったと推定できる。

茨城大学本も、浚明本がそうであるように、本文の脱落箇所が少なくない。その中で、親本の一丁全体を誤り脱したかと思われる箇所が二つある。一つは、

おほ殿うちの御あそびなどよりは、ことなるよがれなどもし給を、あらぬさまにまじらひありくは、うつゝの事にはあらず(22丁オ)。

浚明本では、右傍線部の下に、ほぼ一丁分に相当する記述(傍点部)があつてそれ以下の「をあらぬさま……」に続く。即ち、

おほ殿、うちの御あそびなどよりは、ことなるよがれなどもし給はぬを、たゞ月ごとに四五日ぞあやしく所せきやまひの、人にみえてつくろふべきにあらぬを、……(省略)……われもよのつねの身をも心をもてたらま

しかば、かならずかくてぞおりのほらまし。あないみじ、ひたおもてにて、身をあらぬさまにまじらひありくは、うつゝの事にはあらず(26ノ27ペ)。

他の一つの脱落は、

えんにおしこめてあるべきことならねば、としごろはよづかぬ身のありさまを、おもひなげきながらへりしを、みおきたてまつりてなん、いて侍にし。げに、なにゝかは、かくては忍びかくろひて(59丁オ)。

これも浚明本では、

えんにおしこめてあるべきことならねば、としごろは、よづかぬ身の有さまを思ひなげきながら、さるかたにかはせん、ありつきぬべきよ、とおもひ侍しに……(省略)……われも人もよをなん思ひかきるまじき。御ことにより、とのはむげにふかくなり給へりしを見おき奉りなん、出侍にし。げに、なにゝかはかくて忍びかくろひて(207ノ209ペ)

(五)

浚明本に茨城大学本を対校すると、浚明本の「イ」と注記した本文と共通する場合の多いことに気づく。次表は、浚明本の「イ」傍記本文と本書との異同を明らかにしたものである。参考として、吉田幸一氏が『とりかへばや物語』の伝本を甲、乙、丙の三種に区分した際の甲、乙についても調査した(丙類は浚明本である)。甲類は伊達家旧蔵本、乙類は南三木氏旧蔵本で、古典文庫の『とりかへばや』(上、下)並びに校異として示されたものに拠った。その他、茨城大学本の本文に最も近いと考えられる校註日本文学大系第二巻所収の『とりかへばや物語』(大正十四年刊)も参考として掲げた。同大系本は「例言」として、底本とした伝本を明示するのが常であるが、この『とりかへばや物語』については、「〇〇本をもとし」といった記述を欠き(誤脱か)、単に、

とりかへばや物語は沼波守これを担当し、関根正直博士所蔵岡本保孝の「とりかへばや物語考証」を参照しました。

とのみある。『とりかへばや物語考証』は本文を欠くので、主に注釈の際の参考に使われたと考える。こゝでは大系本として、所収本の本文をそのまま扱う

ことにしたが、それが序のない非浚明本であることは明白である。極めて粗雑な調査ではあるが、本書本文の方向を察知するには十分と考える。
 なお浚明本との異同は、あくまで「イ」傍注本文をもつ部分のみに限定した。表記上の異同は、諸本校訂時に改変され易いので、除外した。
 次表の説明「茨」は茨城大本に、「伊」は伊達家本、「南」は南三木旧蔵

本、「系」は校註日本文学大系所収本。○印は浚明本の本文と一致するもの。△印は浚明本の本文に加えられた「イ」傍注と一致するもの。×印はそのどちらでもないもの。浚明本「イ」傍注の位置は、他本を参照して筆者が決定したものである。なお紙数の関係で、調査は巻三のみを掲げた。

頁行	浚明本本文・「イ」傍注	茨伊南系
149 7	かざりに侍らめもしおも	△△△△
150 2	べきにこそとおぼすぞ	△△△△
150 9	わたり○ことしあれば	○○○○
151 3	ものにおぼしまどふも	△○○△
151 4	ひめ君もやうくいと	△○○△
151 5	けふもうちもうからず	△×○△
151 6	月のあはればかりを思	△○○○
152 8	こよなき心ぞやと心や	△○○○
153 3	ことよくかざるこゝろ	△○○△
153 4	すぎ侍つれとこそと心	△×△△
153 8	おぼしめされぬやうに	○△△○
153 9	姫君なにごとかいはれ給	△○○△
154 3	例ならずさしよりて	×○○△
154 4	さらすばまうでぬべし	△△△△
154 6	聞え給ふ○いどうつくし	△△△△

頁行	浚明本本文・「イ」傍注	茨伊南系
154 7	人めをばおやこのなかと	△○○△
154 9	姫君はいまみつがこめか	△○○△
156 1	心とき○して○くみ侍	×○○×
156 4	我が心ちにもいと	○○○○
156 9	いみじくなき給	○○○○
157 5	くんじ給へるは	○○○○
157 7	いみじくなき給にあれば	△△△△
158 8	ふき○まし給へるねさら	○○○○
159 6	うちみいでたるもうつゝ	△○○○
159 9	わが心はいかにしつる	△○○△
160 6	あばむるにげにも	△○○△
160 9	おぼしてもち給へるして	○○○○
161 7	ついたちころにおはした	△○○△
161 9	そむくやう あらじと	△○○△
162 4	うちさわぎまどひたる	△○○○

頁行	浚明本本文・「イ」傍注	茨伊南系
162 6	ものし給也といふ事だに	○○○△
163 3	野山にまじりてもとめて	△○○△
163 4	よろしからんやは姫君は	△○○△
163 9	権中納言の姫君にかよひ	△○○△
165 8	姫君もその人なりけり	△○○△
166 1	見つけ給へかし	△○××
166 4	ねたくなりてたちばらに	△○○△
166 5	いまにおきてはまゐり	△△△△
166 7	思ひけれとだにきかれ奉	△○○○
166 8	姫君のこゝろのうち	△○○△
167 3	やま／＼にはかなくて	△○○△
167 5	さまなどいと／＼かなしく	△△△△
167 7	うつくしげによりかゝり	×△△△
167 8	はなばなとうつくしく	○○○○
168 6	さるごとのこのましきぞ	△○○△
168 9	ふびんなることに侍	○○○○

178 2	177 8	177 7	177 7	177 6	177 3	177 3	177 3	176 3	175 4	174 9	174 4	173 8	172 2	171 6	171 2	169 6	169 1	頁行
こひしさのたへで待とも <small>かたくイ</small>	さるべきにてこそはらか <small>こそ一本ナツ</small>	いかほど心ざしのなきに <small>にイ</small>	やうくくく <small>まイ</small>	そはなきなん侍 <small>イナツ</small>	かくみたてまつりなん <small>るイ</small>	わがみのよにあるべき <small>上イ</small>	たづぬるこそあめれ <small>ねイ</small>	ばかりこそあるくめれ <small>らイ</small>	ほどこそはとうとし <small>イナツ</small>	おほしよるにもことの <small>もイ</small>	あらぬさまなるにたづね <small>もイ</small>	みしらぬかほなれば <small>とイ</small>	おもひみだれ給へるも <small>つイ</small>	よのつねのこと也 <small>イナツ</small>	また〇かくはとおもふ <small>はとイ</small>	こゝろぐるしければたゞ <small>とイ</small>	身ぞとおもひかくるらん <small>いイ</small>	俊明本本文・「イ」傍注
△○○△	△○○△	△○○△	△△△△	△○○△	○○○○	△○○○	△○○△	×○○△	△○○△	△△△△	△○○△	△△△△	○○○○	△○○△	△○○△	△○○△	△△△△	茨伊南系

188 1	187 7	183 9	183 7	183 6	183 6	183 3	182 8	182 6	181 6	180 5	180 2	180 2	179 8	178 9	178 7	178 5	178 4	頁行
かりさうずくにてあの <small>そイ</small>	これ〇もいとぐるしげ <small>をイ</small>	思ひすぐらんこそ <small>まイ</small>	いととおきもあがらず <small>れイ</small>	月のかさな〇るまゝに <small>れイ</small>	大将におぼえたりけり <small>るイ</small>	見まほしかりき <small>きかりイ</small>	もとにたちより給れば <small>とまりイ</small>	見〇もしらずおかしく <small>る</small>	三人そのともものゝ <small>イナツ</small>	たゞあるさまにてをと <small>りイ</small>	そゝろにすぐし給も <small>こイ</small>	ないしのすけにてぞゝろ <small>すイ</small>	りつきたうせ給にし <small>りイ</small>	ものとりたれば <small>にイ</small>	れいならぬけしきを人に <small>イナツ</small>	けじめしるもはべらんか <small>しイ</small>	わがうせたりとよの人の <small>われさへイ</small>	俊明本本文・「イ」傍注
△○○△	○○○○	△○○△	△△△×	○○○○	△○○△	△○○△	○○○○	△○○△	△○○△	×○○△	△○○△	○○○○	○○○○	○○○○	△○○△	△○○△	△○○△	茨伊南系

197 9	197 8	197 3	195 8	195 7	195 3	195 3	195 3	194 4	192 9	192 3	191 8	191 5	191 1	190 5	189 6	189 6	188 7	頁行
中納言〇忍びて <small>にイ</small>	いとほしてとる思ひきこ <small>をイ</small>	忍ぶるかたの御くるしき <small>心イ</small>	今は十日にも過ぬれば <small>イナツ</small>	などはいとにほひやかに <small>イナツ</small>	忍びたるころ〇かひなく <small>とイ</small>	りかたに <small>りかたイ</small>	かゝる人のあるましかば <small>らイ</small>	うづもれいぶせくはなく <small>もイ</small>	ひとりしもに人ひとり <small>しもへイ</small>	な〇おほし〇そと <small>をイ</small>	かうなんおもふ <small>くイ</small>	かはりがほならん〇と <small>もいイ</small>	人の御ろうかな <small>まイ</small>	なきなげきをし侍しに <small>るイ</small>	との給〇へばおとゞの <small>にしかイ</small>	はらからにはべる人の <small>ナシイ</small>	われによそへ〇て <small>らるゝにイ</small>	俊明本本文・「イ」傍注
△△△△	△××△	△○○△	△○○△	△△△△	△○○△	△○○△	△△△△	○○○○	△○○△	×○○×	○○○○	△○○△	△△△△	△△△△	○○○○	△○○△	△○○△	茨伊南系

209 5	209 3	207 6	206 6	205 9	205 7	205 4	204 9	204 1	203 9	203 1	201 9	201 4	201 1	199 9	199 5	199 1	198 8	頁行
なししる人も侍りきなり	かくて○忍びかくろひ	さま出でこしことに	京よりまうでかへる人	給はせよときこえ給へり	なり給ひにけるも	かの君もことさまになり	いかで○たいめむは給る	すゝろにうせ給やうも	うれしとはよの常なる	もち給へりとときにしや	せざらめとおほえて	ちご君もかたくなどあれ	なつかしくものもいふ	人ごとにしみかくれる	へだてなくありさま	思ひゆるし給も	おもひすぐさん事○こそ	俊明本本文・「イ」傍注
△○×△	△○○△	△○○△	△○○△	△○○△	△○○△	△○○△	△△△△	△○○○	△○○△	△△△△	△○○△	△○○△	×○○○	△△△△	△△△△	△○○△	△○○△	茨伊南系

216 5	216 5	215 4	214 7	214 4	214 3	213 4	213 3	212 5	210 8	210 6	210 5	210 1	209 9	209 7	209 7	頁行
ものとおもはましかば	かくてありへるべきも	御心ぐるしさはたゞいま	たけすこしはづれ○たる	かぎりなきさまにてゐ給	つよにくげなるけしき	かゆなどいさゝかまいり	人にもしられはべりし	おぼし出て○さていかに	むかしのよゝにさるべき	いとたうとひげよらなる	殿は月日○のへだたる	殿にかくてこそありけれ	きはに○侍らず	ゆくかたしられであらば	かくてこの人に	俊明本本文・「イ」傍注
○○○○	△○○△	○○○○	△○○△	△○○○	△△△△	△○○○	△○○△	△△△△	△△△△	×○○△	△○○△	△○○△	△○○△	△○○△	△○○△	茨伊南系

221 1	221 1	220 9	220 9	220 4	220 4	220 3	220 3	219 5	218 7	218 7	218 6	218 6	218 3	217 7	217 5	216 7	頁行
おもひねんじてかはりに	人に見えしられんさま	野山のすゑにあくがれ	み奉らでゆくかたしらぬ	御ゆかりしも○はなれ	さばかりをなん○いと	おもひはべるとしてのびが	侍りしかば見すつる心	世の中はなればやすらか	ひきかへてあまたゝて	身にそひ○ひきかへさる	わが○めのとこの女にて	まうできつるとては	うちまはりて身をわけ	せうそこし給ひつれば	このほどこそるべけれ	とのたまへるはくねく	俊明本本文・「イ」傍注
△△○○	○○○○	○○○○	△△△△	△○○△	△○○△	△○○△	△○○△	△○○△	△○○△	△○○△	△○○△	△○○△	△○○△	△○○△	△○○△	△○○△	茨伊南系

頁行	229 8	229 7	229 7	228 8	228 7	228 4	227 7	226 6	225 7	224 1	223 6	223 5	223 2	222 7	222 7	222 5	222 2	221 9	221 2	頁行	
渡明本本文・「イ」傍注	いひかうじ <small>シイ</small> ○きこえて	おもはずな <small>るイ</small> に <small>ご</small> とを	思ひきこえさす <small>るイ</small>	よのそしりけ <small>を</small> おほ <small>イ</small> さめ	とのをいまひとかた見	いみじく <small>くる</small> ○おほししほる	まつりておはしまし <small>イナシ</small> にし	なかれ給る <small>イ</small> ○はかり	あやしくあいなくおほし	いみじうおほしまどへ <small>は</small> と	いとさや <small>おほ</small> られるほどは	すぐしかたく <small>イ</small> た <small>イ</small>	げにすべてつゆのあかぬ	とて見 <small>イ</small> えたるつれ <small>イ</small>	はらからの御ちぎりなる	女まねび給ひしなれば	うつし心なくこもりぬ給	とおほ <small>イ</small> ささかしきやう	この人までおはせば	△○○△	茨伊南系
	△○○△	△△△△	△△△△	△×△△	△○○△	△△×△	△○○△	△△△△	△×△△	○○○○○	△○×△	△○○△	△△△△	△△△△	△○○△	△○○△	△○○△	△△△△	△○○△		

頁行	238 6	238 6	238 5	238 2	236 9	236 5	235 4	235 2	235 1	233 4	233 1	233 1	232 3	232 1	231 3	231 1	230 2	229 9	頁行	
渡明本本文・「イ」傍注	ひとり <small>イ</small> をとおもはと	ふしなれどたど <small>イ</small> これひと	おりたち見なれけん	いまはおしのでひかくし	こひしくてたぐへしかげ	さまをかへてましよ	大將殿のき <small>イ</small> つけ	町むすめみつ <small>イ</small> つきこえ給	大將は権大納言のこと	る給へるにゆめのやうに	おはしましたやうに	おはしづきてこの姫君	たどおほせしかくながら	おもはんことははづかし	げにさのみは <small>イ</small> いと忍び	かなしと見奉り給へば	かなしく心ぐるし <small>イ</small> きに	我いのちにかへ給へ	△○○○	茨伊南系
	△○○△	△○○△	○○○○○	△△△△	△××△	○○○○△	△○○△	△○○△	△○○△	△○○△	△○○△	△○○△	△○○△	△△△△	△○○△	△○○△	△△△△	○○○○○		

頁行	249 1	248 9	248 5	247 7	247 2	246 8	245 9	245 8	245 4	244 8	243 7	243 2	242 9	242 6	242 1	241 4	239 3	238 8	頁行	
渡明本本文・「イ」傍注	かなしきを <small>我</small> こゝろの	とばかりうちみえて	見あやむるやうもぞ	川にしづみはてなく	こと <small>イ</small> なる女を	あひなくおほしなりけん	またものにもにぬ	とまねぶ人あり	いと哀におもひすまし	それともおほえねは	さこそはとおほすに	かくこそこたへむかたか	こたへむかたのなきま	おほつかなきもしのび	いや見ればきくにくも	いせなとてつづから	そむき給はて給	きこえあはせ給ふとて	△○○△	茨伊南系
	△△△△	△○○△	△○○△	△○○△	△○○△	△○○×△	△○○△	△○○×△	△○○△	△△△△	△○○△	△△△△	△△△△	△○○△	△○○△	△△△△	△△△△	△○○△		

右表についての分析を試みる。

右表は、浚明本文とその対校に用いられた「イ」印傍記本文の二つの本文を基準にして、茨城大学本の性格を明らかにしようとしたものである。「イ」印傍記本文を重視したのは、①浚明本が「イ」印注記を多く保育する、②その傍記本文が浚明本の欠陥部を十分に補っている、それが非浚明本の代表的な一本であったと推定できるからである。「茨」以下四本の○印、△印の符号は、当該伝本が浚明本に近似するか「イ」印傍記本文に近似するかを、ごく単純化して示したものである。×印は、二者よりかけはなれた独自本文というよりは、二者の中のいずれかの誤写と考えられる場合が多いのであるが、こゝでは一応判定不能として扱うことにした。

この結果を集計すると、

茨城大学本

○印……三〇例

△印……一七〇例

×印……八例

伊達家旧蔵本（古典文庫所収）

○印……一五四例

△印……四八例

×印……六例

南三木氏旧蔵本（古典文庫校異）

○印……一三七例

△印……六二例

×印……九例

校註日本文学大学所収本

○印……二八例

△印……一七六例

×印……四例

右の集計結果を単純に解釈すると、茨城大学本、校註日本文学大系所収本は浚明本と対立する性格（△印）を強く備えており、又、伊達家旧蔵本、南三木氏旧蔵本は、巨視的に見れば浚明本の本文（○印）の枠内に収まり、その中で南三木氏旧蔵本にやゝ非浚明本格的性格を認めることができると言いうことができる。右の判断を確認する意味で、次に右表における○、△、×の反応の型とその出現回数を調査した。その多い順に四例を示すと、

(A)型 △○○△……九二回

(B)型 △△△△……三一回

(C)型 ○○○○……一六回

(D)型 △△△△……一五回

(A)は、「伊」「南」が浚明本に、「茨」「糸」が浚明「イ」本文に一致する型で、巻三における出現頻度92で最多。右結論を支えるものといえよう。

(B)は四本とも「イ」本文に一致する型で、出現頻度31。『とりかへばや物語』の異同が一般に誤脱、誤写等のミスによって生ずる場合が多いこと、また浚明本の本文が山岡浚明の校訂に成る可能性のあることを考えると、これも納得できる数字である。(C)は(B)と反対に、四本とも浚明本に一致する型。この数も(B)と同様に考えてよいだろう。(D)は「伊」のみ浚明本と共通し、他の三本が「イ」本文と一致する型。「南」が「伊」に比して、非浚明本格的性格の強いことの論拠となる数字である。いずれにしても、この結果は先の判断に大きく矛盾するものではなかった。

参考文献

- 鈴木弘道『とりかへばや物語の研究』（笠間叢書）
- 校註日本文学大系第二卷（大正14年、国民図書）

吉田幸一『とりかへばや』上・下（古典文庫）

鈴木弘道『浚明本とりかへばや』（むさし書房）

鈴木弘道「天理図書館蔵島原本とりかへばやについて」（『平安文学研究』第三十七）

桑原博史「とりかへばや物語諸本解題」（『東洋大学紀要21』）

小木桶『散佚物語の研究』（笠間書房）

内閣文庫蔵『とりかへばや』（四冊）

付記 茨城大学の序文については鈴木弘道氏の御教示を賜わった。浚明本との比較には佐藤雅子さんの協力を得た。内閣文庫の閲覧に際しても、係の御好意を賜わった。ここに附記して謝意を表する。

A Study on "TORIKAEBA YA-MONOGATARI" Based on The Hand-written
Copy Stored in The Library of Ibaraki University

Mamoru Taguchi

Abstract

It has widely been acknowledged that it was not until the Meiji Era that "TORIKAEBA YA-MONOGATARI" came out in print. However, the copy of this work stored in the Library of Ibaraki University, which is the hand-written copy done by Chitate Kido in 1922, has Kido's preface to it which indicates his intention of bringing it to the world. In view of the afore-mentioned widely accepted idea concerning the date of its publication, this preface by Kido makes his hand-written copy of "TORIKAEBA YA-MONOGATARI" a unique one of its kind. In this paper I have attempted to introduce the readers to Chitate Kido's hand-written copy, thereby shedding light on the characteristics of this work.